





# 第3回（2013年度） 地域研究コンソーシアム賞

地域研究コンソーシアム（JCAS）では、2013年度の地域研究コンソーシアム賞の選考を行いました。その結果、研究作品賞2作品、登竜賞1作品、研究企画賞1活動が決定しました。応募いただいたすべての方と、活発かつ慎重な審議をしてくださった審査委員の方々に御礼申し上げます。以下では、JCAS賞審査委員会から報告された、審査の経緯と作品の講評を掲載いたします。

なお、本文は、JCASのホームページでもご覧いただくことが可能です。

<http://www.jcas.jp/about/3.html>



## ◆ 審査の経緯

今回の募集に対して、研究作品賞候補作品8件、登竜賞候補作品6件、社会連携賞候補活動3件、研究企画賞候補活動6件の推薦があった。研究作品賞の候補作品については第一次審査によって選抜された作品2件、登竜賞については3件、社会連携賞は3件、研究企画賞については3件の候補作品・活動をJCAS賞審査委員会での審査対象とした。これらはすべて第一次審査を経て推薦されたものである。

その後、長崎暢子氏を委員長とし、4名の委員（高木正洋氏・西村成雄氏・二村久則氏・家田修氏）からなるJCAS賞審査委員会において、活発な議論と慎重な審議の結果、それぞれの部門について以下の作品あるいは活動を受賞対象として選出した。

## ◆ 研究作品賞授賞作品（2作品）

### ▶ 島村一平著

『増殖するシャーマン—モンゴル・ブリヤートのシャーマニズムとエスニシティ』（春風社、2012年1月刊）

### ▶ 中溝和弥著

『インド 暴力と民主主義—一党優位支配の崩壊とアイデンティティの政治』（東京大学出版会、2012年2月刊）

## ◆ 登竜賞授賞作品

### ▶ 山本達也著

『舞台の上の難民—チベット難民芸能集団の民族誌』（法蔵館、2013年3月刊）

## ◆ 研究企画賞授賞活動

### ▶ 田畑伸一郎（企画代表者）

ユーラシア地域大国の比較研究（2008～2012年度）

## ◆ 社会連携賞

### ▶ 該当なし

## ◆ 講評

### ◆ 研究作品賞

島村一平著

『増殖するシャーマン—モンゴル・ブリヤートのシャーマニズムとエスニシティ』

中溝和弥著

『インド 暴力と民主主義—一党優位支配の崩壊とアイデンティティの政治』

研究作品賞の2作品に関しては、独創性という点でも優れた作品であるとの認識で、審査員の見解が一致した。選考においては、非常に多くの時間を費やして、どちらがより優れているかが議論されたものの、最終的にどちらか一方に絞り込むことはできなかった。仮にどちらかの作品を受賞作品としたとしても、その差はごくわずかなものとなることから、審査委員全員の総意として、2作品に研究作品賞を授与することとした。

島村氏の著書は、モンゴルの少数民族であるブリヤートの人々のなかで近年隆盛を見せているシャーマニズムを取り上げ、それを近代以降に余儀なくされた国境による民族集団の分断や、大規模粛正の過去と密接に関わったルーツ探求運動として描いた民族誌である。



A5判上製 580頁  
ISBNコード：9784861102998

本書は、空間的には、モンゴル、ソビエト、中国にまたがり、時間軸として、社会主義成立以前、社会主義からポスト社会主義の時代までカバーし、ある国、ある民族を固定的に論じるのではなく、トランスナショナルな視点から流動する社会的・文化的ダイナミクスを描き出している点で高く評価できる。また、エスニシティの研究として、人類学に止まらず、社会学や歴史研究への目配りもおおそかにされていない。

シャーマニズムを、単純な宗教論ではなく、現代の宗教の問題に内在的、客観的に迫りつつ、「自然環境や生業、政治・社会的状況によって変化する『不可知の存在』と人間のあいだにおける象徴的な交換の体系」と明快で新鮮な解釈をもって再提示した点も評価される。加えて本書は、死と生との関係を整理する必要があるという問題がクローズアップされる契機ともなり得た。

更に本書は「読み物」としても優れている。これは本書を成り立たせているフィールド研究が、極めて詳細かつ正確な観察に立脚している点に負うところがあり、そ

のことはとりもなおさず当該研究の質の高さを示唆するものと言える。また調査活動の中で表れる呼称や言語表現の意味解釈への慎重かつ深い洞察からは、独自で注目に値する研究スタイルもうかがわれた。

以上より島村作品は、今後の地域研究のあり方を示す重要な視点と新しい領域を提示しており、研究作品賞に相応しいと評価する。

中溝氏の著書は、宗教暴動を政治学の立場から、政治変動、特に政党政治と選挙過程に関する体系的分析を通して、暴力の政治的帰結という主題として捉えた作品である。政党政治分析という政治学の王道をゆく分析枠組みをとりながらも、10年以上にわたる現地調査ではビハール州に焦点をあてた暴動に関する豊富なインタビュー調査を用い、ローカルな制度分析とともに地域研究として価値あるモノグラフに結実している。本書の特に優れている点は、第1に、政治学だけでなく、社会階層、社会運動論の方法も駆使し、社会階層とカースト分析とを組み合わせる宗教動員モデルを構築し、これによって宗教と暴動をインドの政治社会構造の変容によって解明しようとした点にある。さらに、社会階層分析をより精緻化するために、カースト制度の流動性に着目したこと、現代インドの権力構造理解には20世紀初頭に遡って歴史的視座も持ち合わせているところも評価される。



A5判 359頁  
ISBNコード：9784130362429

第2に、政治変動をたんに政治的な要因のみで説明するだけではなく、緑の革命の導入によってビハール州農業の経済状況が改善され、それに伴って同州の社会・経済的階層構造も次第に変化していったという経済的要因も政治変動の媒介変数として用いた点が挙げられる。この経済的变化によってカースト制度にも影響が及び、それがひいてはカースト制度と政党構造の関係を変化させる結果をもたらしたという分析は理論的で説得力がある。

そして第3に、本書の主要な分析枠組みのひとつである「暴動への対処法」の、一次資料を中心とした豊富なデータに基づく精緻な検証である。このアプローチは、インドにおける政治的暴力を、先行研究のように暴力の原因を探るのではなく、その政治的帰結の分析を通じて暴力の克服までを見据えるという、民主主義と暴力の関係を新しい角度から捉えた斬新な研究である。

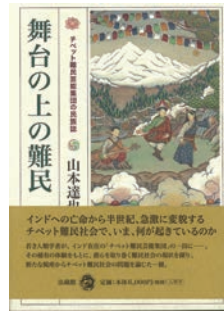
以上により中溝作品は、地域研究に政治学を適用する場合の新しい可能性を示したものとして高く評価され、研究作品賞に相応しいものである。

## 登竜賞

山本達也著

『舞台の上の難民—チベット難民芸能集団の民族誌』

本書は、チベット難民の芸能集団を対象とするフィールドワークを通じて、ディアスポラの生に揺れつつも、チベット・ナショナリズムを体現する存在として生きるチベット難民を活写したものである。本書で語られるチベット・ナショナリズムはイデオロギーではなく、生身の人間の営みである。



A5判 414頁  
ISBNコード：9784831874412

本書がJCAS賞の登竜賞として評価されたのは、まずテーマ設定の巧さである。JCASは地域を越え、学際的に対象に迫る研究を奨励しているが、本書はこの趣旨にふさわしく、中国とインドという2つの地域のはざまで生きる、あるいは世界を旅するチベット芸能集団を取り上げ、その現代性を内側から描き出している。わけでも本書が高く評価されたのは、内在的視点である。著者は研究対象であるチベット難民芸能集団の一員に加わり、いわゆる「参与観察」を超えて、傍観者に留まっていたのでは決して得られない知見を数多く提示する。しかも全体を物語として読み応えのある作品にまで仕上げた。さらに、研究対象との距離を保つため、「言説分析」手法を用いて叙述の客観性を担保しようとした。本書は地域研究の新しい可能性に挑戦した点で登竜賞にふさわしい。ナショナリズムの語り方も、確信的なナショナリストを登場させるのではなく、多様な選択肢の中で揺れる人間への親近感をもとに、その揺れを揺れとしたままナショナリズムを描いたのも評価できる。また、その揺れが著者自身の心情の現れでもあるという自己分析も、明確になされている。もっとも、著者が本書の叙述において客観性を常に保ち続けることができたかという点、後で述べるような留保をつけざるをえないが、それを差し引いても、チベット難民の現在を独自の視点から描いた力量は登竜賞に値する。

審査委員会は著者の将来性を高く評価しつつも、他方で、叙述に粗削りな面も見られるなど、以下、審査の過程で指摘された課題を率直に記すが、それは本書の著者に対してだけでなく、後に続く若手研究者にとっても他山の石としていただきたいからである。

まず、本書が芸能集団を取り上げ、音楽を叙述の素材とした以上、何らかの形で、例えば、楽譜を入れるなど、音が読者に聞こえてくる工夫が必要だったのではないかと。また、伝統的なチベット音楽と比べて、本書が描くチベット

ポップはどこが違うのか。チベットポップはインドや中国のモダンポップとどこが違うのか。人を描くと同時に、その描く対象が表現手段としている音楽そのものを読者に伝えることは、必須だったと思われる。

ふたつめは研究対象との距離感である。チベット難民という研究対象に徹底的に溶け込み、自他の区別が無くなるまで埋没したことは、本書の誕生にとって不可欠だった。しかし、研究書として本書を叙述する際には、チベット難民を取り巻く状況との距離を客観視することが必要だったのではないかと。すなわち、著者はチベット問題を扱う中国側の研究を「批評に値しない」として切り捨ててしまっているが、研究書としては中国側のチベット問題研究に正面から向き合う必要がある。本書がダラムサラでチベット難民向けに出版されたのならともかく、日本の読者を前提にしている以上、無条件に、まずチベット独立ありき、という立場は、乱暴に過ぎるのではないかと。チベット難民の主体性に注目し、さらにそこに参加した著者自身の立ち位置も含めて分析するという著者の意気込みは高く評価できるが、そこから直線的に、中国側の研究を「批評に値しない」としてしまいう態度には、再考の余地がある。本書では、チベット文化についてラサ中心主義を批判する視点があり、また、先行研究についても独自の整理をしておき、その点も評価できるので、今後、著者が複眼的視点を持ってチベット難民問題を広い立場から考察してくれることを期待したい。ラサ、中国、インドの視点、あるいは、他の地域の難民と比較する視点などを取り入れて、本書の著者しかできない広い視野からのチベット難民論を展開していただきたい。

以上のように幾つか注文もあるが、著者には、今の若手研究者にありがちな「早熟老成」ではなく、本書で見せたような、徹底的に対象に迫る情熱を失うことなく、今後さらに研鑽を積んで、新しい地域研究の可能性をさらに拓いてほしい。

## 研究企画賞

田畑伸一郎（企画代表者）

ユーラシア地域大国の比較研究

本企画はロシア・中国・インド等のユーラシア地域大国について、様々な側面から比較検証を行うプロジェクトである。成果面では、比較軸に基づく総合的、かつ内在的理解をめざした新たな歴史認識のプラットフォームの構築がなされようとしている。その意味で、現代において経済的なプレゼンスを高めるロシア、中国、インドを地域大国と位置付けて比較することによって、地域の特殊性や固有性を見いだすことを得意とする地域研究者が、敢えてそれらの国々がもつ一般性・普遍性の解明に挑み、中軸国（先進

国) 認識とならぶ新たな基軸としての経済・政治モデルの提示を試みている点は、日本における世界認識を拡大し、大きく転換するうえでインパクトを持ち得ている。また、地域研究諸機関の学際的連携体制の構築、国際シンポジウムの開催や外国人研究者の招聘などの国際的研

究交流の展開、公募研究の採択やプロジェクト研究員の採用等による研究支援体制の構築、論集刊行による成果の対外公開を通じて地域研究を推進させた点は、今後の地域研究にインパクトを与える業績と言えよう。

研究企画としての広範さは、経済的發展論・統治モデル論・国際秩序論・近代帝国論・越境論・文化的求心/遠心力論の6大イシューとして示され、現時点で最初の2冊が出版されている。どのイシューもきわめて意欲的に学問的挑戦を試みており、今後ユーラシアプレートに乗っている諸地域を理解する新たな「支点」を提供している。と同時に、日本の立ち位置に関する再検討と再定義が、ますます必要となっていることを明示的に提起している。まさに、北米プレートにも乗っている日本の21世紀世界における歴史的空間的位置を考えるべき新しい眺望を提供しているといえよう。

もちろん、この企画が地域研究領域の独自の、そして普遍的な課題追求に充分であるということではなく、今後さらに世界に開かれた日本における成果として、ロシア・インド・中国のみならず欧米などの学会における国際的発信とそこでのインターアクションが期待されるだろう。

## 社会連携賞

該当なし

今回、推薦された活動のうち2件は誰でも視聴できる形での映像作品であり、地域研究に普段触れることの少ない一般の人たちにとって、地域理解の契機のひとつとなっている点は、注目すべきである。ただし映像作品ではない他の1件も含めて、いずれの活動も、地域研究という視点からの問題意識は希薄で、地域が抱える問題への掘り下げが不足している点は否めず、審査委員会としては、今後、映像やその他のメディアによる社会連携の可能性を期待しつつ、本年度の受賞者は該当なしとすることとした。



シリーズ・ユーラシア地域大国論 1  
A5判 328頁  
ISBNコード：9784623066407  
シリーズ・ユーラシア地域大国論 2  
A5判 268頁  
ISBNコード：9784623066179



## JCAS 賞とは？

地域研究の推進を活動の主な目的とするJCASでは、毎年、地域研究に関する顕著な業績や活動に対して、JCAS賞を授与しています。既存の学問分野には必ずしも沿っていない研究業績や活動であっても、JCAS独自の視点で、優れた研究や活動を積極的に評価したいと考えています。ぜひ、応募ください。以下は、JCAS賞に関する趣旨の抜粋です。

JCASは、その規約において、「国家や地域を横断する学際的な地域研究を推進するとともに、その基盤としての地域研究関連諸組織を連携する研究実施・支援体制を構築することを目的とする。これにより、人文・社会科学系および自然科学系の諸学問を統合する新たな知の営みとしての地域研究のさらなる進展を図る」と述べ、それに続いて1) 共同研究の企画・実施・支援、2) 海外研究拠点の設置運営と国際的な共同研究・臨地研究の企画・実施、3) 研究成果の国内外への発信・出版、4) 地域研究情報の相互活用・共有化と公開という具体的目標を掲げています。JCAS賞は、上記の目標を達成する上で大きな貢献のあった研究業績、共同研究企画、そして社会連携活動を広く顕彰することを目的として授与されます。

研究作品賞は「個人ないし共同による学術研究業績で、賞の趣旨に合致する公刊論文ないし図書」に対して、登竜賞は「大学院生および最終学歴修了後10年程度以内を目安とする研究者による学術研究業績で、賞の趣旨に合致する公刊論文ないし図書」に対して、研究企画賞は「共同研究企画で、賞の趣旨に合致し、今後の地域研究の動向に対して大きなインパクトを与えたシンポジウムの開催や研究プロジェクトの遂行などの企画」に対して、そして社会連携賞は「学術研究以外の分野で賞の趣旨に合致する活動実績」に対して授与されます。

地域や国境、そして学問領域の境界を越えた意欲的な作品、企画、活動の推薦をお待ちしています。

## 研究作品賞

増殖するシャーマン—モンゴル・ブリヤートのシャーマニズムとエスニシティ

島村一平



### 略歴

滋賀県立大学人間文化学部准教授。専門は文化人類学・モンゴル研究。早稲田大学を卒業後、テレビ番組制作会社に勤務。取材で訪れたモンゴルに魅了され退社、1995年にモンゴルへ留学。モンゴルでの滞在は延べ6年に及ぶ。1998年モンゴル国立大学大学院修士課程修了、2004年総合研究大学院大学単位取得退学。博士（文学）。モンゴル系の少数エスニック集団のシャーマニズムについてナショナリズムやエスニシティとの関係から考えてきた。現在、モンゴルにおいて地下資源開発による遊牧社会の変容について調査中。2013年度日本学術振興会賞受賞。

### 受賞にあたって

今回は、このような栄えある賞をいただき大変光栄に思うと同時に私のような未熟な者がいただいてよいのかと大変恐縮しております。受賞作品の『増殖するシャーマン』は、私の6年強に及んだモンゴル滞在の総決算だったように思われます。実は、私は最初から研究者を目指していた人間ではありません。大学を卒業した後、テレビ番組制作の仕事（AD）をしておりました。取材で訪れたモンゴルにすっかり魅せられてしまい「ひょっとして前世はここで生まれたんじゃないだろうか」と思ってしまったのが、幸せな勘違いの始まりです。気づいたらモンゴルの大学院で民族学の勉強をしていました。

人間は追い詰められたとき、爆発的な想像力（あるいは妄想力）を働かせるものです。私が後にこの作品でテーマとしたブリヤートの人々の苦難の歴史と彼らの豊穡な宗教的想像力に共感を覚えながら調査をできたのも、テレビマン時代に平均睡眠時間3時間の中でごかれた経験があったからかもしれません。

モンゴル留学中、いろいろな出会いと別れがありました。そんな中、私を研究者になるように勧めてくれ

たのは一人のモンゴル人の女性でした。私の最初の妻です。モンゴル人の家族となることで義父はずっとドライバーとして私の調査につきあってくれました。残念ながら、妻は私の大学院在学中に病を得て他界しました。義父も昨年夏、亡くなってしまいました。

また、フィールドでモンゴルのブリヤートの人々には本当によくしていただきました。ブリヤートの人は律儀で、どこか日本人と似たようなところがあります。調査協力の御礼に日本からもってきた小さなお土産を渡すと必ずお返しに何かプレゼントをしてくれるんです。それは食べきれないほどの乳製品だったり、羊一頭であったりしました。中には20世紀初めにレニングラードで出版された本当に貴重な本を頂いたこともありました。「私を持っているより、お前が持っている方が役に立つだろう」といって、気前よくプレゼントしてくれたんです。

大学院博士課程時代には指導教官である松原正毅教授や小長谷有紀教授をはじめ、多くの先生方にご指導賜りました。こうした日本とモンゴルの多くの方々への助力がなければ、この作品はきっと世に出ることはなかったでしょう。お世話になったすべての方々に厚く御礼を申し上げたいと思います。

最後になりましたが、これから地域の声を救いあげようような研究ができるよう精進してまいる所存であります。本当にどうもありがとうございました。

## 研究作品賞

インド 暴力と民主主義——党優位支配の崩壊とアイデンティティの政治

中溝和弥



### 略歴

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科准教授。博士（法学）。東京大学大学院法学政治学研究科博士課程単位取得退学。インド・ジャワハルラール・ネルー大学留学、人間文化研究機構研究員などを経て、2013年より現職。暴力と貧困の解決をライフワークとし、民主主義がこれらの課題を解決する可能性について、インドを中心とする南アジアを拠点に研究を進めている。今回の受賞作では、2012年に第24回アジア・太平洋賞特別賞を受賞した。

## 受賞にあたって

このたびは大変栄えある地域研究コンソーシアム賞研究作品賞をいただき、誠にありがとうございました。政治学からインド研究を始めた人間として、最初は対象のあまりの大きさ、そして深さに戸惑うばかりでした。大学生の時に貧乏旅行でインドを訪れたことはありましたが、研究となると話は別で、何を、どのように始めればよいのかわからぬまま、手探りで炎天下のなかを歩き回っていました。研究を進めるほどに地域研究の奥深さに感嘆いたしましたが、今回このように地域研究者としての賞をいただけたことを大変光栄に存じます。

本書ではインドの政治変動を解明することを目的としました。変動の要因を探求する過程で、政治にとどまらない経済・社会的要因を分析することは是非とも必要であり、かつ歴史的な文脈に位置づけて初めて理解できることを痛感いたしました。そのため本書では、包括的なアプローチを意識し、次の三つのことを試みています。第一が、デリーの中央政治と末端の村の政治をつなぐこと、第二が、アイデンティティの政治を宗教アイデンティティとカースト・アイデンティティの相互作用に着目しながら体系的に把握すること、最後が、暴力・暴動の原因ばかりではなく、これがもたらした政治的帰結を分析すること、であります。インド政治の分野においては、いずれも新しい試みであると自負いたしておりますが、講評では、これらの試みに加え、経済的要因、歴史的要因も織り込みながら分析を行なった点を評価していただき、大変ありがたく存じております。

戦争と貧困の問題を考えるために大学院に進学した私が、インドを自分の地域として選択したのは、最初の旅行で目撃した圧倒的な貧困の存在ゆえでした。研究を進めるうちに、宗教暴動やカースト・階級に起因する暴力の程度も甚だしいことを学び、関心は戦争を超えた暴力全般に広がっていきました。21世紀を迎えても夥しい暴力を経験している人類が暴力を克服することができるのか、私にはまだ答えが見つかりません。インド民主主義の実践のなかにヒントはあると考えていますが、これからも暴力、そしてもう一つの研究の柱である貧困を解決する政治制度としての民主主義の可能性を検証していきたいと考えております。最後になりますが、審査委員の先生方、これまで私の研究を支えて下さった皆様に心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

## 登壇賞

舞台の上の難民—チベット難民芸能集団  
の民族集団

山本達也



### 略歴

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属「現代インド研究センター」客員研究員／NIHU研究員。文化人類学・インドおよびネパール在住チベット難民の研究。2009年3月京都大学大学院人間・環境学研究科より博士（人間・環境学）取得。近年は、チベット難民によるポピュラー音楽の制作と消費、流通等からチベット難民若年層の社会参加の様態や彼らのネットワークの様態を明らかにするとともに、自らもその過程に参入している。

## 受賞にあたって

今回、栄えある賞をいただきました拙著は、インドで暮らすチベット難民の人々、特に亡命政府の運営する芸能集団 Tibetan Institute of Performing Arts に所属する演者たちの活動から難民社会の様態を描き出したものです。彼らの演目は難民として暮らす人々のアイデンティティの礎となることを期待され、それと相互作用する関係にあるチベット難民ナショナリズムにとって大きな役割を担っています。拙著が描き出すのは、このナショナリズム形成に伴うグローバルな政治経済的関係とその問題点、そして、そのナショナリズムを演じる若者自身が自らを位置づけられない難民社会の状況だと言えます。また、独立か否かという二項対立的政治理解が大半を占めるチベット難民社会に関する先行研究に対し、拙著が試みたのはいわば、チベット難民社会に暮らす人々を同時代的な存在と捉えなおし、従来の二項対立的政治理解とは異なったチベット難民社会理解を提示することであったと言えるかと思えます。

超国家的な影響を受けると同時にローカルな状況にも根差したチベット難民ナショナリズムとそれをめぐる人々の実践を描く拙著は、国家の枠組みを超え、グローバル規模で展開する事象を扱う今日の地域研究と軌を一にしているものであると言えます。グローバル資本主義の展開は、人々の生活、そしてその営みを

描く地域研究の枠組みにも大きな変化を要求しています。今日では、人々の生活は思わぬ形でグローバルな関係の網の目の中に結びついています。そのことが人々や文化に摩擦や破壊をもたらすのは事実です。しかしながら、同時に、グローバルな関係の網の目に位置づけられることで、人々の生活の中にかつてない新しい想像力が芽生えもしています。たとえば、拙著で描かれるテンジンの姿はその一例と言えるかもしれませんし、若者たちを中心に、これまでのナショナリズムとは違った新たな連帯の形を模索する動きが出てきています。これらの状況が示すように、グローバルな関係の網の目で人々が生きる新たな想像力とそれに基づいた実践を描き出すことは、これからの地域研究においても重要な方向性であるように感じられます。私たちと同時代に難民社会に生き、激変するグローバル資本主義の影響を受けつつも自分たちの生き方を探り続ける彼らの活動に今後とも着目し続けながら、来たるべき地域研究のあり方を追求していきたいと思っています。

## 研究企画賞

新学術領域研究

ユーラシア地域大国の比較研究

田畑伸一郎



略歴

北海道大学スラブ研究センター教授。専門はロシア経済、比較経済体制論。東京大学教養学部卒業、一橋大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得退学。1986年にスラブ研究センター助教授、1997年から現職。2004年から2年間、スラブ研究センター長、2012年から北海道大学ヘルシンキオフィス所長兼任。ロシア・マクロ経済の統計分析をもっとも得意とするが、近年は、ロシア極東経済、日ロ経済関係などにも取り組んでいる。

● 受賞にあたって ●

新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」(2008～2012年度)には、国際関係、政治、経済、

歴史、社会、文化のディシプリン別に6つの計画研究が設けられ、総勢50人を超えるロシア、中国、インドなどを研究する地域研究者が参加しました。メンバー全員を代表して、このような賞を授賞いただいたことにお礼申し上げます。

この研究は、1990年代後半にスラブ・ユーラシア、中国、南アジアのそれぞれの地域について実施された重点領域・特定領域研究を束ねるようなものと位置付けていました。そして、このような地域を束ねるという発想は、地域研究コンソーシアムに負うところが大きかったと思っていますので、この地域研究コンソーシアムにおいて、私たちのプロジェクトが高く評価されたことを大変嬉しく思います。

講評のなかでは、「地域の特殊性や固有性を見いだすことを得意とする地域研究者が、敢えてそれらの国々が持つ一般性・普遍性の解明に挑み、中軸国(先進国)認識とならぶ新たな基軸としての経済・政治モデルの提示を試みている点は、日本における世界認識を拡大し、大きく転換するうえでインパクトを持ち得ている」と評価していただきました。ロシア、中国、インドなどを比較するにあたり、こうした比較研究でよくあるように、国別に分担するのではなく、私たちのプロジェクトでは、研究分担者が複数の国の比較を自ら行うことに努めてきました。研究分担者のほとんどは、いずれかの国についての専門家であり、その国の固有性・特殊性に強いこだわりがあるわけですが、そういう者が自ら複数の国を比較することにより、新たな発見や深みのある比較が可能になったのではないかと自負するところです。

私たちのプロジェクトは、ユーラシア地域大国の比較という枠組みが、これらの地域大国それぞれの固有性・特殊性をより深く理解するのはもとより、地域紛争、宗教対立、少数民族、グローバリゼーションなど、現代世界の様々な問題を考えるうえでも有効であることを示せたのではないかと考えております。今後もこの枠組みを使った研究を様々な形で続けていきたいと思っています。

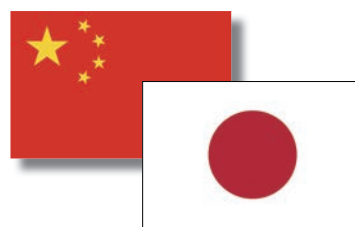
ミネルヴァ書房からは、6巻シリーズの3巻目、4巻目として、岩下明裕編著『ユーラシア国際秩序の再編』が2013年12月に、望月哲男編著『ユーラシア地域大国の文化表象』が2014年3月に刊行されました。さらに、英語での成果をRoutledge社から刊行します。ご期待ください。



# 日中関係の質的変容をどう理解するか —他地域の視点から捉えなおす—

愛知大学国際中国学研究センター

高橋五郎



## 趣 旨

2013年度地域研究コンソーシアムの一般公開シンポジウム「日中関係の質的変容をどう理解するか—他地域の視点から捉え直す—」は、11月9日約200名が参加して愛知大学名古屋校舎で開催された。以下、今回のシンポジウムの企画・運営等に関わった中国研究者の一人として、その概要を報告したい。

今回のテーマの狙いは、政治・経済・社会・文化・歴史等の視点から研究対象の国又は地域(以下「国」と中国との関係、あるいは様々な形でそこに実在する中国を基礎に、地域研究者が現在の日中関係の動向をどう見ているのか、そこから中国研究者は何を得るべきなのかを探ろうとする点にあった。

対象国に焦点を当て深く研究するという地域研究の性格から、その国の研究を通じて本来の研究の対象外の中国を、そして対象外の国同士のことである日中関係を考察しようということは、本来、方法的な枠外にあるといえる。これらの研究は、本来、日中関係研究者に属する分野であることはいうまでもない。さらに「日中関係」という言葉から想起されるのは、主には政治や外交論であり、地域研究者の立場としては、個人的な関心の有無やその濃淡は別にして、専門外と思われるのが普通である。

それにも拘わらず、今回の地域研究コンソーシアムのシンポジウムがこのようなテーマを設定した理由は、地域研究者個々人が専門とされる対象国研究の「視点」に注目し、期待したからということができる。地域研究の方法が一定のルールを持つにしても、その前提である「視点」は特別のルール

を持たず、地域研究者個々人の自由な観念や発想にもとづいて固定される。磨き抜かれた地域研究者の視点は、おそらく、地域研究の方法的なルールを超える研究個性と言い換えてもよいと思う。この意味では中国地域研究においても多数の「視点」があり、そこに中国地域研究の豊かさがあることも事実であるが、中国地域以外の、すなわち複数の「他地域の視点」には、より広い「視点」があると思われる。今回のテーマは、この「視点」から直接に、あるいはそれを応用しながら、日本と中国の関係をどうみているか、知りたいという発想に基づいていた。

趣旨説明の際、筆者が簡単に紹介をしたことだが、テーマ中の「質的変容」の趣旨は、量(主に経済的、軍事的な)を指標とした場合に、日本が中国の上を行く縦列あるいは垂直的な日中関係は終了し中国が日本を上回る関係に変わったのだが、これによって、日中関係は、ようやく本質的な並列的あるいは水平的な関係に変わりうるという意味である。量的関係を指標とするかぎり、縦列的・垂直的關係を基にする二国間関係に変化は生まれない。ただ立場が変わるのみである。そこにも一定の安定や調和があることは事実であるが、本来あるべき安定や調和ではない。いわゆる日中逆転は量的な指標のもとで起き、そして新たな不安定な関係が生まれている。日中関係における対立や競争がより表面化しやすい契機となったのである。

この状態を協調的、調和的なものにしようとするれば、新しい二国間関係を構築する相互に洗練された努力が求められる。この変化は日中の二国間関係にとどまらない影響を与える。



◆基調講演「日中関係—現在の経済問題を中心に」会場風景

日中に関係する主要な地域や国に、この変化を受け入れる受け皿あるいは枠組みの変容も必要になろう。

しかし「他地域」の視点に、こうした趣旨に直接応える報告を期待することが容易でないことは誰もが承知している。その理由は、報告者がこの趣旨を十分に理解したうえで報告することを念頭に、事前の問題意識を摺合せする機会がほとんどなく、しかも筆者が自責の念を込めていえば、趣旨自体が解りづらい内容で、説明も十分にこなれていなかったからでもある。そういう意味で、報告者に申し訳ないと思っている。今後は、この考え方を整理して、再構築を試みたいと思う。

## 報 告

さて、にもかかわらず、今回のシンポジウムを総括すれば、報告者及びコメンテーターをはじめとする参加者の方々の豊富な知見と巧みな論理展開によって、少なからぬ成果を得ることができたと思う。

エリック・ハーウイット氏は中国経済専門家の立場から基調講演を行い、悪化する日中関係が経済的な紐帯を強めるかぎり衝突は回避できるとした。これに対し加々美光行氏から、経済関係の相互利益を無視した非理性的な軍事衝突が起こる可能性を秘めているのが現在の日中関係だとする指摘があった。両者とも中国を熟知した研究者であり、双方譲らぬ主張には説得力があった。高橋からのアメリカは中米関係をどう見ているかとの質問には、米中関係が非常に重要であり、それゆえアメリカは日中関係の安定を望んでおり、在日米軍のプレゼンスはそのためにも有効であるとされた。

続いて登壇した4名のご報告も、それぞれ興味深い内容であった。

宮原暁氏「フィリピン諸島からの視点—華僑・華人からの

視点を中心に—」はフィリピンにおける中国を見る視点の多様さ、経済力を握る華僑・華人の存在ゆえの非中関係の民間次元における絆の頑丈さ、国交樹立時に交わされた領土問題の棚上げの崩壊、それによって悪化する非中外交関係の現状を描かれた。中国から見た中菲関係はともかく、ここからフィリピンの民と国家の中国関係における錯綜する一致とズレが浮かび上がった。日中関係とよく似た構図でもあり、日菲、菲米、日米、米中それぞれの関係とのつながりが反映されていることが窺われる報告であった。

水野敦子氏「ミャンマーと中国の関係—胞波関係の変容—」は「同胞」ともいえる両国の相互依存関係の強さが、軍政から民政移管となるに従って変容する姿、中国との関係を維持しながら多方面外交の構築に臨む現在の政権の様子を描かれた。中国との関係は、国民の間に潜在する反中的な民意に配慮しつつ進めることが課題だという。ミャンマーと中国の関係は、強固な経済面での相互依存関係に注目すれば日中関係と酷似し、他方、日本がミャンマーをチャイナ+1の対象国と見、ミャンマーが対中関係の相対化の一環として日本を有力な多方面外交の対象国の一つと見ているという点で、互いに対中関係を介した新しい当事国関係を構築しつつあることが窺われる報告であった。

王柳蘭氏「北タイと中国との関係—移民が生み出す関係性—」は北タイに住む雲南人移民ムスリムが中心となり中国、ミャンマーからのメッカ巡礼団の組織者となるなどの経験を活かし、マスター・ナラティブとして地域間関係を展開、彼らが多元的な方向で地域社会を形成してきた姿を述べられた。この「境界を変えていく」という視点に立つと、多元的な共生や少数民族の視点から国際関係を見ることができるととされた。要約すれば、日常化する移民が国家的な境界を

越えて形成するネットワークが、マクロの国際関係とは異なる文脈で維持、展開されているとされた。

かなりの飛躍を覚悟していえば、これを日中関係に敷衍すれば、日本に住む華僑・華人が形成する国境を超えるネットワークの実態と意義にもっと注目すべきだということにもなるか。

久末亮一氏「台頭する中国の影で—シンガポールの内なる摩擦を例に—」は中国が台頭することで起きている国家間の問題とは別に、シンガポールを例に、国内における民衆間の摩擦や社会的問題に注目された。シンガポールは華人人口が絶対的優位にあり、それゆえに親中国だとみられがちであるが、それは政府による戦略的な視点からくる中国との同源性の強調から生まれた誤解であって、実は中国移民労働者に対する反発派が最も多く、欧米や日本等との関係も小国ゆえの現実的なバランスの上に成り立っているとされる。現実的には、中国との国家関係からは見えない両国間の緊張が社会の底流に流れているとする。この指摘はシンガポールという小さな国がおかれた歴史的・地政学的条件、独裁的政治権力の性格等と無縁ではないが、現実的な対中関係の巧みさを知ることにつけ、現在の日中関係の堅苦しさを浮かび上がらせてもいる。

## コメントと総合討論の概要

以上の報告に対して、5名の方から発言が行われた。うち2名は開催地名古屋の特徴を生かすためにお願した実業界に属する方々であり、他の3名は地域研究の専門家である。以下、出された主な質問と回答の概要に絞って報告する。

まず実業界からの一人、明治電機（株）の大藪一彰氏は、水野報告に関し、民政移管後のミャンマーが日本にどのようなことを求めているか、チャイナ+1としてどうか、王報告に対しては雲南ムスリムのタイにおける地位はどう変化したかを質問された。

水野氏は、投資先として悲観論と楽観論がある、大規模工業団地開発について実効が伴っていない、日本は軍政時代中途半端な対応をしたとの評価もあり2015年の総選挙の結果次第で評価が変わる可能性もあるとされた。王氏はタイ国籍の取得や定着化、山村と農村との格差等から、社会的地位の上昇に開きがあると回答された。

東海日中貿易センターの原田康浩氏は、宮原報告に対し、国民の対中意識、領土問題の成り行きについて、久末報告に対しては今後の対中政策をどのようにしていくつもりなのかについて質問された。

宮原氏はフィリピン人あるいは中国系フィリピン人の対中意識には一貫性がなく、領土問題も変わりうるという考え方

が一般的で、これは重要なことだとされた。

続いて北海道大学スラブ研究センターの岩下明裕氏は、国際関係にはいい時も悪い時もある、日中関係も同様であるとコメントされたあと、タイの場合は国際関係と無関係に人的交流があり、シンガポールでは国際関係だけでは見ることができない多くの問題があり、フィリピンやミャンマーにも人的交流やネットワーク論がある。4人のご報告に対し、ではこのような人的交流ネットワークと権力性との関係をどう考えるのか質問された。

宮原氏は、人的交流は避けがたい、その過程で、さまざまな問題が出てきたところで着地点が浮かび上がるというものではないか、特に対中関係では「クレオール性」が問題を吸収できる点で注目すべきだ、水野氏はミャンマーの華人ネットワークが国家権力に与えるプラス・マイナスはなく融和的であった、王氏は北タイではその歴史性から、どちらに付くかをめぐって中国と台湾の確執がなお残るが民族性を意識したネットワークが循環的に地域安定をもたらしていると回答された。

愛知大学経営学部の川井伸一氏は久末報告のうち中国移民に対する国民の意識に協調的部分はないのか、タイの循環型ネットワークのタイにおける位置づけはどうなっているのか、ミャンマーと中国の垂直的貿易関係の今後、中国系移民が対中関係に与えた影響はなにか、総じて、各報告における対中関係はどのように理解すべきかを質問された。

宮原氏は、フィリピン人は対中意識に一貫性や統一見解を持つ必要はないと思っている、水野氏は製造業の発展が必要だとの認識を持っているが実現途上にあること、王氏からはムスリムが民族性を維持しながら循環型ネットワークを形成していること、中国のムスリムとの協調性もあり宗教同一性がその核になっていること、久末氏は国民と中国移民との間の協調性を期待することは難しいとの回答があった。

愛知大学現代中国学部の加々美氏は4つの国を結ぶ一つの概念はシーレーンであるが、中国の海洋戦略との関係から見る必要がある。このうちユーラシア大陸から離れているフィリピンはやや異なった見方が必要ではないか、ラベリングの問題からフィリピンと中国との対立をどうみるか、ムスリムとテロの関係はどうか、非同盟だったミャンマーがいかにして中国からの投資を受け入れるようになったのか、ソフトパワーとハードパワー等の問題をどうみるか、等の質問がされた。

宮原氏は日中関係に应用できるかどうかは別にして、中国系移民がラベリングすることで国民国家形成において重要な要素となってきた、水野氏はミャンマーが陸橋としての役割を持ち、中国がインド洋へ出る地政学的な関係から重視され

してきたこと、王氏はムスリムとテロとの関係について北部ムスリムは中国系でありテロが起きるタイ南部のムスリムとは違う点が中国との繋がりを強調する手段ともなっている、久末氏はソフトパワーによるネットワークがシンガポールには不可欠なこと、シンガポールの対中関係は日中関係に直接に使うことができにくいと回答された。

以上のほか、フロアーからも多数の質問やコメントが出され、最後まで熱心に討論に聞き入ったことは印象深かった。

## まとめ

今回のシンポジウムでは、冒頭でも触れたが、研究対象国と中国との関係の考察を通じて、日中関係を直接取り上げた報告はみられなかった。4報告のすべては「他地域」と中国との関係を主題とする報告に止まっていた。この意味で、今回のテーマに応える内容ではなかったとする見方があっても仕方がない。

しかし今回のシンポジウムに意義がなかったかといえ、決してそうではなかったと思う。報告には、中国の取り上げ方や表現は中国そのものであったり、華僑・華人あるいは移民ムスリム、移民労働者であったりとけって統一性はなかったが、これこそは地域研究者の細かな「視点」を反映しており、日中関係といった場合に想起される国家間あるいは政府間とは別の民衆レベルに「視点」がおかれている点で共通であった。ここに、当該国と中国との特定の分野における関係を見る「視点」があり、そのどの場合においても葛藤があり融合の困難があること、その上で、いかに協調や安定を構築するかという課題に直面していることも共通していた。日中関係とは異なる性格の関係が多くあり、かつまた似た関係もある。いかなる関係も日中関係に直ちに適用できるものではないが、この点はどの国の場合においても同じであ

ろう。

日中関係論について、日本では中国研究者の一人舞台となっていると聞いていいが、「他地域」では、日本人研究者による当該地域の深く広い研究を基にさまざまな姿の中国が報告され、これをめぐって議論された。同じ並びで言えば、中国以外の海外の日本研究者による日本についての深く広い研究を基にした日中関係論があってもいいのではないか。ハーウィット氏の立場は、アメリカ人による中国研究者の視点に立つ日中関係論となっているが方法は同じである。つまり、これを一般化すればA国人によるB国研究を通じたB国とC国の関係を見る視点である。グローバル化する時代、一国に内在する複数の「国」あるいは関連性を捉えようとすれば、むしろ自然なことである。

しかしこの方法に、果たしてどれだけの意義と普遍性を期待することができるか、いまの段階では確かなことは言い難いが、今回のシンポジウムで試みたことはこのことなのである。

そして「他地域」研究者同士が明瞭な問題意識の下で集まり、別の「他地域」を議論することが、個々の地域研究の視点の複眼性・立体性をより確かなものとするように思われたシンポジウムでもあった。

今回のシンポジウムに参加して、その流れが個別報告、コメント、総合討論と移っていくに従って議論の中身が練り上げられて充実度を増し、そして徐々に焦点が絞られ、目指すテーマの解明に向けて接近して行ったことが実感された。残念ながら日中関係の質的変容の理解を相互に試みようとする段階までには至らなかったが、その一歩手前までは歩み寄れたのではないかと思う。そうした手ごたえを実感させて下さった報告者、コメンテーター、総合討論参加者の高い専門的知識と研ぎ澄まされた論理展開力に感謝したい。



◆第3部「総合討論」会場風景



## 子どもたちが生物文化多様性から学ぶもの

同志社大学総合政策科学研究科

飯塚直子

モンゴル遊牧民の12歳の女の子、オウンティユちゃんはなぜ草原を移動しながら生活するんだろう？北米先住民のカスカ族のおじいちゃんは、なぜヘラジカを殺したあと魂を自然界へ還そうとするのだろうか？

食べ物、民族衣装、楽器、動物の毛や骨などの五感に訴えるモノ、物語のような展開。そして写真、動画を中心に、アジア、アフリカ、北米の4つの地域でのフィールドワークを疑似体験し、感じたことを語り合うワークショップ・プログラムを、3人の若手地域研究者と共に開発した。そして、京都市内の小学2～6年生の親子を対象に『京都で世界を旅しよう！2013 地球たんけんたい』として、2013年11月30日（土）と12月7日（土）京都大学東南アジア研究所（東南研）にて4つのワークショップ（トリップ）を実施、その後12月14日（土）には、京都の森でのフィールドトリップを実施した。

プログラム開発にあたっては、共通テーマを2つ設定した。1つ目は「自然環境に根ざした暮らし方と自分の暮らし方の比較」、2つ目は「地域の人々の心や価値観にふれる」である。トリップ1『大草原！羊と旅する女の子』では、モンゴル遊牧民の生活を家畜、屠殺、搾乳、燃料などから丁寧になぞり、遊牧民の子ども自身が撮影した、彼女が大切だと考えるものの写真を参加者と共に読み解いた。トリップ2『わたしの家は雲の上』は、ヒマラヤ地域のチベット族の「心の幸福度」を医学的に調査している東南研連携助教の木村友美さんを中心に開発。「ツァンパ」を食べながら、5000mの高地での暮らしの様子や、心の幸福度が高い理由を学んだ。トリップ3『森でゴリラに会ったら、どうする？』では、京都大学アフリカ地域研究資料センター研究員の大石高典さんと、カメルーンのパカ・ピグミー族の森へ、音や映像を多用したバーチャル探検を行った。キノコ、ハチミツ、動物などの狩猟採集の様子や、自然に還る葉っぱの家を見ながら、森の精霊やゴリラなど「人間の力を越えたモノ」とのつきあい方を学んだ。トリップ4『ボクはオオカミ族』は北九州市立大学特任講師の山口未花子さんと、動物の毛皮や骨に触れながら、動物と話することができるという北米先住民・カスカ族の狩猟や儀礼の様子、精神的つながりを学んだ。また、トリンギット族アデアくん（10歳）が大切だと考えるものの写真を読み解きながら、「ボクらは土地の一部」という言葉の意味を考えた。そして、トリップ5『京都の森へ行ってみよう！』では、山田勇京都大学名誉教授と北山杉のふるさと、中川北山町へのフィールドトリップへ出かけた。地域振興協議会の方々の協力を得て、枝うち、たき火で魚あぶり、丸太磨き、木工などのプログラムを実施した。

3日間でスタッフを含め、のべ170人の参加を得た。参加者から継続実施への強いリクエストもあった。ワークシート、アンケート結果等については別途報告書にまとめる予定である。

先端的科学技術、高度情報化社会の中で、私たちはさらに未知の領域への階段を上がる。一方、環境破壊、コミュニティの危機など現代社会の深刻な問題点は、60年代から指摘され続けている。文化人類学は近代のあり方への危機感を抱いた人々により地平が開かれた学問であり、地域研究には自然と文化が乖離しない、すなわち今日的环境問題を引き起こさない営み—持続可能な生態知や人間の心の拠り所などに関わる多くの知見の蓄積がある。「同じ地球にいる」モンゴルや先住民の子どもたちの心の奥底にあるものを想像し、彼らとの「つながり」や、「多様性」を知ることは、日本の子どもたち自身が「未来」のあり方を思索する無類の材料になるだろう。次世代に伝えるべき価値の本質を探究しながら、自然と人間の多様な関係性に学ぶ方法論を構築していきたい。



トリップ2 天・風・火・水・地を表す五色の祈禱旗、マニ車、カタなど、チベット族の祈りのツール体験をする。



トリップ3 旅のスタートはお互いの自己紹介と地図の確認。カメルーンはどこ？と学ぶ子どもたち。



トリップ4 話しやすい雰囲気づくりが大切なグループワーク。親しみやすいデザインのワークシートや名札形式のパスポートも用意した。



トリップ5 美しい北山杉の枝から枝へ、名人は梯子無しで飛び移る。子どもたちも枝うちを体験した。





## 日中関係の変化—その背景にあるものをさぐる

愛知大学国際中国学研究センター

顧令儀

2013年11月10日（日）、JCAS次世代ワークショップ「日中関係の変化—その背景にあるものをさぐる」を愛知大学で開催した。

本企画を開催する背景として、8月5日に日本の言論NPOと中国日報社が行った「第9回日中共同世論調査」の日本人と中国人、双方の相手国に対する印象の大幅な悪化があげられる。調査結果は日中双方の国民に対する「良くない印象」はいずれも9割を超え、過去最悪であった。しかも、このような状況の中で日中両国の関係改善の出口は未だ見えていない。そこで、なぜ国交回復当時良好だった日中関係が今日のように、過去最悪の状況になったのかという問題意識のもと、本企画を行った。歴史は現在そして未来に繋がっている。特に日中関係について考える際、近代以降の日中の歴史は不可欠な視点である。また近年では政治、経済、外交、教育など様々な要素が関係しており、多角的な視点から議論する必要があるというのが、この企画の発端であった。発表内容は以下の通りである。

愛知大学の野口氏は清末期に、清朝各行政分野に派遣、雇用された日本人教習について報告を行った。日本人教習の派遣は列強の利権獲得に対する支那保全論を背景とし、経済進出を行う上で必要な情報収集、人材育成等の対中政策の中で行われていったと述べた。

北京大学の郭氏は歴史問題だけでなく、政治問題となっている日中領土問題について報告を行った。沖縄返還時の領有権および「棚上げ」合意の有無に関する各自の主張、歴史認識は平行線に止まっている。そうした中、欧州石炭鋼鉄共同体にみられる資源共同管理体制は日中間においても大いに参考になるものであると述べた。

愛知大学の村上氏は外交的視点から、国際社会のなかで周恩来の外交政策と日本の反応について報告を行った。国際的に中国共産党を承認する動きが加速されると思われる中で、日本は「政経分離」の政策を維持し、日本と中国、日本と台湾の関係は大きく変化しなかったと述べた。

西安交通大学の杜氏は中国の大学生に行った日本に対する意識調査、および中国の講義科目の一つである国際形勢教育について報告を行い、日中関係を客観的、かつ冷静に見るためには教育・学生交流が重要であると指摘した。

中部圏社会経済研究所の陳氏はアジア国際産業連関表の分析を通じて各国分業ネットワークの実態について報告を行った。中国の最終需要の拡大はASEAN5、韓国、台湾の中間財供給により支えられていることが明白で、今後の発展のためには日中両国間のみならず、アジア各国の総合の協力が必要であると指摘した。

発表後は各報告に対する質疑応答、総合討論を行った。現在の日中関係の背景にある政治、外交、歴史認識、中国における教育、経済関係の状況を理解することで現状をより客観的にみることができ、また日中両国研究者が一同に会して議論できたことは非常に有意義であった。



「日中関係の変化—その背景にあるものをさぐる」会場風景



## 多民族社会におけるアイデンティティの形成・分断・再統合 —ヴォイヴォディナ地域研究確立に向けて

東京大学大学院 総合文化研究科 表象文化論研究室

亀田真澄

2014年2月2日、北海道大学東京オフィスにおいて、次世代ワークショップ「多民族社会におけるアイデンティティの形成・分断・再統合—ヴォイヴォディナ地域研究確立に向けて (Identity Formation, Dissolution, and Reorganization in Multiethnic Societies: Toward the Establishment of Vojvodina Area Studies)」を開催した。本企画は、セルビア北部の多民族地域ヴォイヴォディナ自治州の地域特性を考察する脱領域的な国際ワークショップとして構想したものである。本ワークショップではヴォイヴォディナ地域研究の出発点として、専門とする言語やディシプリンの異なる参加者たちがそれぞれの経験や知識を共有し、国際的な研究者ネットワークを構築することを課題とした。

日本・アメリカ・マケドニアの若手研究者による報告、既に権威ある日本の専門家たちによる討論、さらにセルビアから招聘した現地専門家による基調講演を組み入れることで、国際的な意見交換の場を提供することができた。当日は、使用言語を英語に限り、そしてヴォイヴォディナという聞きなれない地名を掲げた会であったにもかかわらず、言語・民俗学・歴史・表象文化・文学・音楽などを専門とする研究者や大学院生の約20名が参加した。このうちセルビア人研究者が6名にのぼっていたこともあり、現地での民族的マイノリティをめぐる動向についての直接的な意見交換が活発に行われ、企画段階で想像していたよりもはるかに多種多様なトピックと問題点が浮き彫りとなった。

今回のワークショップでは10を超える民族的マイノリティの事象が話題となったが、そのなかで明らかになったことのひとつは、それぞれの方向性の違いはもちろんあるものの、多くの民族的マイノリティが互いに似通った問題を抱えているということであった。またアイデンティティの多重性と錯綜のありようをフォローし続けるということの困難についても話し合われた。村単位で民族構成の大きく異なるヴォイヴォディナでは、コミュニティ単位での綿密な調査が必要不可欠であり、また言語や文化の保持ということ考えた場合には、内部に入ることすら難しいような閉鎖的なコミュニティにこそ足を向ける必要があるということが強調された。また、彼らの言語権運動はどのような推進力によって維持されるか、EUなどの国際組織、NGO等の活動はその役割を担うのか、また民族的マイノリティ同士の協働関係が国内・国際的なレベルでどのように結ばれているかについてもさらに調査すべきであるということ、そして研究者と現地実務者による共同作業や、研究成果を現地へとフィードバックする方法を模索することが今後の課題として呈示された。当該分野を代表する研究者との充実した意見交換が行われ、そして若手研究者たちが国際的な交流の機会を持てたことは、これから世界に向けて研究成果を発信していくべき我々にとって大変貴重な経験になったと確信している。



「多民族社会におけるアイデンティティの形成・分断・再統合—ヴォイヴォディナ地域研究確立に向けて」会場風景

# 北東アジア学会

会長 佐渡友哲

ホームページ：<http://anears.net/>



日中韓の学会会長によるシンポジウム 会場風景

北東アジア学会は、日本海側の諸都市で対岸交流への機運が盛り上がった1994年に環日本海学会として設立され、今年20周年を迎えます。設立当初には、北海道から九州までの日本海側都市にある大学、シンクタンク、行政機関に所属する会員が中心でしたが、その後、太平洋側都市で活躍する会員の数も増えました。日本海及び日本海周辺諸国・地域に関連する諸問題を中心に、社会科学のみならず自然科学、人文系分野に至る学際的研究により、それら諸国・地域の交流・協力と平和的発展に寄与することを目的としています。したがって本学会には、歴史学、政治学、経済学、社会学、地理学、文学といった伝統的な学問分野だけではなく、国際政治、公共政策、地域開発、環境、観光、海洋など様々な分野を専門とする会員がおります。現在の会員は、海外・院生会員を含め約250名です。

この地域には、地域固有の多様な課題があるとともに、同時にローカルな視点からもグローバルな視点からも研究が求められていることから、2007年に現在の北東アジア学会へ名称を変更しました。本学会の基本的活動は、年1回の学術研究大会の開催と学会誌を発行することですが、国内外の諸学会との交流・協力や人材育成にも取り組んでいます。今日、北東アジアにおいては政治・外交のみならず、経済社会の発展、歴史認識の共有、環境問題の深刻化など多様な課題が山積していますが、それらの解決へ向けた研鑽も私たちの使命と考えています。

本学会は、北東アジアにおける平和で持続可能な発展を支える知的集団として活動しておりますが、具体的には、

北東アジア研究の深化と知の交流をはかる学術研究大会の開催、学会誌『北東アジア地域研究』（年1回）による研究活動の発信、そしてニューズレター「北東アジア学会つうしん」（年4回）による会員相互の研究交流活動を行っております。さらに若手研究者の育成・研究奨励、そして会員と非会員との学術交流促進を目的に、地域規模の「サテライト研究会」を開始し、これまで東京、京都などで4回開催してきました。

国際的な取組としては、韓国東北亜経済学会との学術協定に基づく相互交流、中国マクロ経済管理教育学会との友好交流、国際シンポジウムの開催などを行っております。さらに、学会設立20周年を前に、英文学会誌『The Frontiers of North East Asian Studies』（通称FES：年1回）を昨年秋に創刊し、世界に発信する試みを始めました。FESは、これまで富山大学極東地域研究センターが発行してこられた英文紀要から移管されたものです。FESの投稿については審査がありますが、会員以外の方々にも開かれております。この地域に関心のある方によるご投稿をお待ちしております。

最後になりましたが、私は昨年11月に開催されたJCAS年次総会に初めて参加させていただき、その素晴らしい管理運営体制に感動しただけではなく、これまでの研究成果のストックと加盟団体間のネットワークに大変な刺激を受けました。これからJCASの活動に連携・協力しながら、私たちの学会も充実・発展していきたいと考えております。



# 大阪大学適塾記念センター

センター長 江口 太郎

ホームページ：<http://www.tekijuku.osaka-u.ac.jp/>



(左)大阪大学適塾記念センター（1941年に国史跡、1964年に重要文化財に指定）（大阪市中央区北浜）

(右)大阪大学豊中キャンパス大阪大会館（2004年に国の登録有形文化財建造物に指定）内に発足した適塾記念センター

大阪大学適塾記念センターは、2011年に大阪大学の新しい部局として誕生しました。センターには「適塾運営部門」「大阪学研究部門」「オランダ学研究部門」が設置され、適塾とその関連資料の維持管理、適塾関係者に関する研究や顕彰、適塾を育んだ都市大阪の研究、蘭学塾・適塾と縁の深いオランダの学術文化の研究推進等を担っています。また、1952年に設立され長年適塾の研究に貢献してきた「適塾記念会」も現在センター内に置かれています。専任教員・特任研究員と、学内各部局に所属する兼任教員とが協力して各部門の事業を推進しています。

適塾は、西洋医学研究や種痘事業等幾多の業績をもつ蘭学者・医学者緒方洪庵（1810-1863）が、1838（天保9）年に大坂瓦町に開いた塾であり、近代日本の国家形成に関与する幾多の人物を輩出しました。現在、大阪市中央区北浜（当時は過書町といった）に現存する適塾の建物は、手狭になった瓦町の適塾を移転するために1845（弘化2）年に洪庵が購入した江戸時代後期の町屋です。日本で唯一の現存する蘭学塾の遺構として貴重なものであり、1941年に国史跡、1964年に重要文化財に指定されています。

適塾は洪庵没後、明治期に入ってもしばらく存続していましたが、1869（明治2）年に洪庵の息子緒方惟準を院長として設立された大阪仮病院と、オランダ人医師ボードウィンを迎えて惟準ら適塾門人らを中心として創立された大阪医学校は、幾多の変遷を経て大阪帝国大学医学部そして大阪大学医学部へと至っています。適塾の建物は1942

年に国（当時の大阪帝国大学）の所有となり、1976年から足かけ5年間にわたる改修を経て一般に公開されています（2014年1月現在、耐震改修工事のため閉館中、展示品の一部は大阪大学中之島センターにて展示中）。

適塾記念センターでは現在、適塾建物の管理と、緒方洪庵および適塾門人に関する研究・顕彰事業、関係資料の収集・保存等をすすめています。緒方洪庵の没後150年、および適塾の開設175周年にあたる2013年には、より広く適塾と緒方洪庵の事蹟を伝えるため、大阪大学および適塾記念センターではさまざまな取り組みを行いました。

2013年4月には、適塾の展示リニューアルを実施し、展示資料は原則としてすべてレプリカを作成して置き換え、パネル等もすべて一新しました。8月には適塾創設175周年・緒方洪庵没後150年記念大阪大学シンポジウム「医の知の未来へ」を開催しました。また10月～12月には大阪大学総合学術博物館にて特別展「緒方洪庵・適塾と近世大坂の学知」を開催しました。このほか『緒方洪庵全集』の刊行事業や所蔵資料の目録刊行に向けて、調査研究を実施しています。

歴史・学術文化研究の学際化が進展する中、オランダ学研究部門を有する適塾記念センターでは、こうした適塾・洪庵研究の成果の国際的な発信力や研究協力関係の強化をも模索していきます。

（センター教員 廣川和花・大谷順子）

# 関西外国語大学イベロアメリカ研究センター（CEI）

センター長 林 美智代



関西外国語大学・イベロアメリカ研究センター（ICC:4F）

本学にスペイン語学科（1966年に開設）を母体にしてイベロアメリカ研究センターが設立されたのは2011年11月のことである。一般的に「イベロアメリカ」という言葉はイスポノアメリカ（旧スペイン領アメリカ）とブラジル（旧ポルトガル領）から構成される地理的空間を指す総称として用いられることが多いが、当研究センターはその設立母体からして、それにスペインを加えたさらに広大な地域に関する研究・教育活動および文化活動の推進を目的として立ち上げられた。とはいえ、当研究センターが設立されるまで、当該地域に関わる研究・教育や文化活動が行なわれてこなかったわけではなく、長年にわたり内外の研究者や文化人を招いて数多くの講演会や文化行事が開催されてきた。また、ここ7年間、学外や海外から数多くの専門家を招き、学生のみならず一般市民をも対象として、ラテンアメリカの政治・経済・歴史・文化に関する連続講座が開かれてきた。なお、当研究センターは、設立以後、年2回、内外の研究者や文化人による講演会やシンポジウムを主催してきた。当研究センターには10名の教員が所属し、それぞれ、経済学、歴史学、文学、文化人類学、農学、語学などの専門分野から広義のイベロアメリカ研究に従事しているが、センター所属の各メンバーの研究・教育活動のさらなる充実と社会貢献を目指して、2013年に地域研究コ

ンソーシアムへの加盟申請を行った。

2014年6月、本学において日本ラテンアメリカ学会の年次大会が開催される予定である。そのシンポジウムでは、「共生経済と多元的社会—ラテンアメリカから日本へ」をテーマに、21世紀のグローバリズムが惹起している社会問題を再生エネルギー、雇用、マイクロファイナンス、新しい市場システムの構築の各分野からラテンアメリカの経験に学び、グローバル社会を生きるわれわれ自身が示唆できることは何かを問う。地域研究がめざす往還的なパネルディスカッションも企画されている。今後、当研究センターは、内外、専門分野を問わず、さまざまな地域研究者との幅広い交流を通して往還的研究の実現を目指していきたい。



ホームページ：[https://www.kansaigaidai.ac.jp/contents/info/center/ibero\\_americana.html](https://www.kansaigaidai.ac.jp/contents/info/center/ibero_americana.html)

# EI CENTRO DE ESTUDIOS IBEROAMERICANOS

# 岐阜女子大学南アジア研究センター

センター長 ペマ・ギャルポ



2013年国際情勢講演会「日本外交におけるインドの重要性」

岐阜女子大学南アジア研究センターは、2000年8月に岐阜県岐阜市に所在する岐阜女子大学の附置研究所として開設されました。2013年6月より、地域研究コンソーシアムに加盟を承認していただきました。新加盟にあたり、本研究センターの概要をご紹介します。

本研究センターは、南アジア地域（インド、スリランカ、パキスタン、モルディブ、ネパール、ブータン、バングラデシュ、アフガニスタン）を専門とする国内唯一の大学附置研究所です。南アジア地域の地域研究、さらに、日本と南アジア各国との関係、あるいは、南アジアを取りまく国際関係と現状などの課題について、研究と調査活動を進めています。

2013年度の本研究センターのセンター員は、センター長のペマ・ギャルポ以下、客員教授6名、特別研究員12名により構成され、特別研究員は南アジア現地に居住する2名も含まれます。また、これらセンター員には、日本だけでなく、インド（日本在住1名、インド在住1名）、中国（日本在住1名）も含まれています。専門とする分野は、各国の政治・経済・社会動向の分析研究、南アジアにおける国際関係、日本と南アジアの協力、アメリカと南アジア、あるいは、中国と南アジアなど、幅広く多彩な研究者による「南アジアに関する総合的地域研究拠点」であり、すでに創立13周年を迎えました。

研究活動実績としては、インド・バングラデシュ・スリランカ・ネパールにおける教育環境に関する共同研究プロジェクト（岐阜県国際交流センターより助成）、インドの

バナーラス市の世界産登録のための協力調査事業（岐阜県国際交流センターより助成）、「日本を知ろう！」プロジェクトとしての南アジア各地における講演会開催などがあります。

また外務省の助成を受け、「国際情勢講演会」を定期的に東京で開催し、歴代駐インド大使を講師として毎回100名以上の参加者を得ています。

本研究センター内部では、「定例研究会」を開催し、センター員の研究発表、および質疑応答、討議を続けています。また外部講師を招いて「南アジアフォーラム」を開催しています。また大学では、南アジア言語・文化の授業を開講しています。

特に2013年から14年は、南アジア地域では議会総選挙が続いて行われています。そこで、「2013-14 南アジア総選挙シリーズ」としての研究会を開催しています。

これら本研究センターの研究成果としては、紀要である「南アジア・アフェアーズ」を年刊発行しています。本研究センターの活動、各研究員の活動を紹介するため、「岐阜女子大学南アジア研究センター ニュース」を電子版にて随時発行しています。

本研究センターは、今後もさらに研究活動を展開する所存であり、本フォーラムに集う皆様のご指導をお願い申し上げます。

お問い合わせは、[csas@gijodai.ac.jp](mailto:csas@gijodai.ac.jp)、活動は、<http://www.gijodai.ac.jp/csas/>にて紹介しています。



# 『地域研究』 第14巻第1号 第2号が刊行されます。

## 『地域研究』 第14巻 第1号



- [巻頭言] 「アラブの春」はどこに？／白杵陽
- [総特集] グローバル・スタディーズ
- [総特集にあたって] グローバル・スタディーズ—地域研究の地殻変動／福武慎太郎
- [座談会] 日本におけるグローバル・スタディーズの受容と地域研究／白杵陽・遠藤泰生・寺田勇文・宮崎恒二・峯陽一・福武慎太郎（司会）
- [第I部] グローバル・イシューと地域研究
- ◇福島、チェルノブイリ、アイカを地域とグローバルな視点から考える／家田修
  - ◇紛争と開発をめぐる地域研究のアプローチ／幡谷則子
  - ◇平和構築と地域研究—今何が求められているのか／中西久枝
  - ◇グローバル・イスラームと地域研究／赤堀雅幸
  - ◇環境問題とむきあう—モノ研究からマルチ・サイテット・アプローチへ／赤嶺淳
- [第II部] 東南アジアをめぐるグローバル・イシューと地域研究
- ◇グローバル・ヒストリーと東南アジア史／太田淳
  - ◇グローバル・スタディーズと東南アジア華僑・華人研究／相沢伸広
  - ◇イスラーム世界と人びとの移動から地域研究を考える—イスラーム改宗者とフィリピン・ムスリム社会の再編／渡邊暁子
  - ◇「スルー王国軍」兵士侵入事件／山本博之
  - ◇環境にやさしいアブラヤシ農園というディスコースの誕生—インドネシアのアブラヤシ農園拡大戦略から／岡本正明
- 『地域研究』13巻1号 特集へのコメント

『地域研究』に関する問い合わせ先 刊行担当（事務）  
journal@cias.kyoto-u.ac.jp



日中の関係を見るだけではなかなか議論は進みませんが、中国がグローバル世界の中で自らの位置づけを変えつつある現在、周辺諸国と中国との関係の中から日中関係を見つめなおそうという愛知大学での企画は、まさにJCASらしいチャレンジングな企画だと思われまます。本文の記事からも、有意義なワークショップであったことが伺えます。

## 『地域研究』 第14巻 第2号



- [巻頭言] レバノンから見えてくる中東／白杵陽
- [特集1] 紅い戦争の記憶—旧ソ連・中国・ベトナムを比較する
- [特集にあたって] 社会主義圏の戦争の記憶を比較する／越野剛
- [第I部] 刻まれる記憶—紅い戦争のプロパガンダ
- ◇ロシアの戦争記念碑における兵士と母親イメージ—国民統合のジェンダー・バランス／前田しほ
  - ◇英雄の表象—中国の烈士陵園を中心に／高山陽子
  - ◇ベトナムにおける公式的な戦争の記憶—記念碑と戦争展示をめぐる考察／平山陽洋
- [第II部] 紡がれる物語—社会主義と戦争のもうひとつの記憶
- ◇ハティニ虐殺とベラルーシにおける戦争の記憶／越野剛
  - ◇革命叙事と女性兵士—中国のプロパガンダ芸術における戦闘する女性像／田村容子
  - ◇ベトナムにおける戦争の記憶の「社会化」—「捕虜となった革命戦士博物館」の事例を通して／今井昭夫
- [特集2] 「三つの祖国」に生きる越境者
- [特集にあたって] 三つの祖国—ルーツの祖国、暮らしの祖国、理念の祖国／篠崎香織
- ◇日露戦争期のアメリカ・ユダヤ人—ダヴィデに例えられた日本／村岡美奈
  - ◇アメリカ・ユダヤ人とブランダイス大学—「社会的正義」のホームとしての可能性／北美幸
  - ◇中華民国の成立とペナンの華人—越境を生きるための複数の場における政治参加／篠崎香織
  - ◇中国系移民の複合的な「ホーム」—あるミャンマー帰国華僑女性のライフヒストリーを事例として／奈倉京子
  - ◇「西」への道—オランダにおけるインドネシア出身華人の軌跡／北村由美
- 第3回地域研究コンソーシアム賞 受賞者発表  
『地域研究』13巻2号 特集へのコメント

地域研究コンソーシアム・ニューズレター No.16

発行：2014年3月

編集：地域研究コンソーシアム広報部会

NL担当：柳澤雅之 編集協力：川島淳子

発行：〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町 46

京都大学地域研究統合情報センター内地域研究コンソーシアム事務局

TEL：075-753-9616 fax：075-753-9602

E-mail：info@jcas.jp HomePage：http://www.jcas.jp/

印刷：(株)土倉事務所 TEL：075-451-4844